

拡がる数学

代数学若手研究会

信州大学理学部

上山 健太

1 代数学若手研究会の概要

代数学若手研究会（以下、代数学若手会）は、代数学を専門とする若手研究者（定義は任意）による研究集会です。代数学若手会は毎年2月または3月に開催されており、会場は回ごとに異なります。講演者は10月から12月中旬頃にかけて募集されます。この研究集会は、花木章秀氏（現・信州大学）、西中恒和氏（2025年3月まで兵庫県立大学）、稗田吉成氏（現・大阪公立大学工業高等専門学校）によって立ち上げられ、1996年3月に大阪市立大学（現・大阪公立大学）で第1回が開催されました。直近では、2025年3月に第29回が大阪大学で開催され、約30年の歴史をもつ研究集会となっています。創設当初より、若手研究者の研究発表の場であると同時に、交流と成長の場としての役割を担ってきました。年々講演者の数が増え、講演内容も多様化していることから、代数学若手会が広く認知され、ますます重要な研究集会となっていることを実感しています。

代数学若手会は、主に学生によって運営されている研究集会です。各回の運営は、5名程度の世話人からなるチームによって担われており、その中には1名の代表世話人が含まれます。代表世話人は指名制で、代表世話人を担当した人がその次の代表世話人を指名する形式をとっています。代表世話人は、博士課程1年または2年の学生が務めることが多いです。新たに指名された代表世話人は、主に自分の所属大学の大学院生に依頼して世話人のチームを構成します。その際、会場となる教室の手配などの事務的な手続きを円滑に進めるために、また運営に関する相談役として、世話人の1名あるいは会場責任者を大学教員にお願いすることが通例となっています。

近年では、代数学若手会は4日間の開催が定着しています。歴史を振り返ると、第1回および第2回は2日間開催、第3回から第20回までは3日間開催でした。2009年の第

14 回には、その回の世話人であった相原琢磨氏（現・東京学芸大学）、高橋亮氏（現・名古屋大学）、故・宮原大樹氏を中心に、代数学若手会の前日にセミナー形式の勉強会を行うという新たな試みとして、「若手セミナー（若手会セミナー）」という別の集会在ち上げられました。この若手セミナーは、代数学若手会が回を重ねるごとに規模を拡大していく中で、よりアットホームな雰囲気集会もあったほうがよいという意図から始められたものです。その後、若手セミナーと代数学若手会を合わせて4日間で開催するスタイルが数回にわたり継続されました。やがて、若手セミナーが「（主に学生である）世話人が話を聞きたい研究者に講演を依頼できる貴重な機会である」という点が重視されるようになり、さらに両集会を分けて開催する意義が次第に薄れていきました。こうした背景から、2015年の第7回若手セミナーを最後に若手セミナーは発展的に解消され、翌2016年の第21回から代数学若手会は4日間開催になるとともに、新たに招待講演枠も設けられるようになりました。

過去の代数学若手会の情報は下記のサイトにまとめられています。

<https://sites.google.com/view/algebra-wakate/>

各回の世話人が、その回のホームページを作成しています。およそ10年前までは、各大学のサーバーを利用してホームページを作るのが一般的でしたが、近年ではGoogleサイトの利用が定着しています。各回のホームページには、講演者による報告集などの有益な情報が掲載されており、それらが散逸してしまわないよう、また可能な限り情報をアーカイブする目的で、上記のウェブサイトが設けられています。代数学若手会にお世話になった、また若手を応援する一人として、上山がこのサイトの管理を担当しています。

2 代数学若手研究会の誕生と草創期

せっかくの機会なので第1回の世話人の方々にお話を伺い、稗田氏に「代数学若手会を立ち上げることになったきっかけ」を、花木氏に「代数学若手会初期の頃に考えていたこと」を教えていただいたので、ここで紹介します。

【代数学若手会を立ち上げることになったきっかけ：稗田氏より】

開催当時、第1回の世話人の他のお二人はすでに職を得ておられましたが、私は大阪市

大の博士課程に在籍している大学院生でした。当時は私が修士課程に入学した頃よりも多くの院生が在籍していました。その修士課程の院生の一人から、「稗田さん、トポロジーにはトポロジー新人セミナーという合宿形式のセミナーがあるみたいですけど、非可換環論や有限群の表現論（私の専門）にはそういうものはないんですか？」と尋ねられたことがありました。そう、この質問がすべての始まりだったのです。

そもそも、私は指導教員である津島行男先生の助言から、当時すでに 20 回以上開催されていた環論シンポジウム（1996 年以降は、環論および表現論シンポジウム）や、不定期開催の多元環の表現論シンポジウムなどに積極的に参加するようにしていました。これらの集会は、賢島や館山などで合宿形式で行われることもあり、院生も含めた若手研究者が参加・発表しやすい、フレンドリーな雰囲気の集会でした。とはいえ、私のようにお世辞にも優秀とは言えない院生が気軽に発表できる場ではありませんでした。ただこうした集会を通じて、西中さんや当時千葉大学の院生だった花木さんなど、他大学の若手教員や院生と交流するようになりました。

そして 1995 年、「修論発表会のような内容でもよいから、院生が気軽に発表・議論でき、また院生同士が交流できるような集まりができないか」という話を、西中さんや花木さんをはじめ、研究集会で知り合った若手教員や院生に投げかけたところ、多くの賛同を得て話が進んでいきました。

具体的な開催時期は、修論発表会との関係を踏まえて、とりあえず（これがキーワード！）翌 1996 年 3 月初旬とし、会場は資金や合宿会場の確保の見通しが立っていたわけでもなかったので、比較的集まりやすく、かつ言い出した私が押さえやすいという理由から、とりあえず大阪市大を会場に選びました。参加者の募集は、それぞれの知り合いや賛同してくださった先生方に声をかけてもらい、また当時使い始めていた電子メールも活用して呼びかけを行って、とりあえず参加できる人に集まってもらうことにしました。この集会の趣旨から、参加者にはできるだけ 20～30 分程度の発表をお願いし、発表が難しい場合も想定して自己紹介の時間を設けるとともに、懇親会（私としてはここに力を入れていました）も行うことにしました。1 泊で済むように、13 時に開始して翌日の 15 時 30 分終了という 2 日間のスケジュールを組みました。結果として、自己紹介枠も含めて 18 枠中 17 件の発表があり、参加者は 20 名程度となりました。そして第 1 回の終わりに第 2 回の開催が決まり、合宿形式の導入も検討されましたが、とりあえず「継続すること」が

重要という方針のもと、会場は再び大阪市大として、さらに第3回は九州大学での開催へと続いていきます。

【代数学若手会初期の頃に考えていたこと：花木氏より】

初期の頃に私たちが特に心がけたのは、稗田さんも述べているように「継続すること」でした。せっかく開催するのですから、1, 2回で終わるのではなく、続けていきたいと考えていました。初期のメンバーがいつまでも関わり続けるわけにはいきませんから、できれば後を引き継いでくれる人を探し、その人たちが無理なく継続できる仕組みにしたいと思っていました。たとえば、旅費の援助があれば参加しやすくなりますが、それでは次回の世話人が費用面で苦勞することになります。また、当時は研究者を目指す院生が多かったため、実績作りの意味でも報告集があることが望ましかったのですが、これにもお金がかかるため、当時はまだ普及していなかったホームページ上での公開のみに留めました。内容についても、分野を絞った方が深い議論ができるという考えもありましたが、多様な分野の人々と交流できるよう「代数学」と広く掲げることにしました。その結果、この若手会でしか会わないけれども親しい友人が何人もできました。若手の時期は、悩みや壁にぶつかることも多くあります。その中で年に一度、参加者の皆さんに会うことが励みや慰めになっていた人も多かったのではないかと思います。現在もこの集会が継続していることから、こうした考えは決して間違っていなかったと感じています。

研究集会の運営経験がない学生に次回の世話人をお願いすることも多かったのですが、皆さん快く引き受けてくれました。初期の参加者にはリピーターが多く、また世話人でなくとも運営に協力的な人が多かったため、「自分たちの研究集会」という意識が強くあったように思います。「いつまで若手として参加していいのだろうか？」というのは、定番の話題でもありました。代数学若手会を説明する際に用いられる「若手研究者（定義は任意）」というフレーズが示すように、「自分で若いと思っていること」が若手の定義ということになったと記憶しています。代数学若手会に参加しなくなったあとも、多くの方々のつながりが続いており、それは私たちにとって代数学若手会から得られた大きな財産のひとつです。

3 代数学若手研究会の不易流行

今度は、近年（2020 年代）の代数学若手会の動向に目を向けてみましょう。1996 年の第 1 回以来、代数学若手会は毎年開催されてきましたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、2020 年 3 月に予定されていた第 25 回は開催直前で中止となり、2021 年の開催も見送られました。開催に空白が生じたことや、オンライン形式での研究集会が徐々に一般的になってきた状況を受けて、第 26 回の世話人は、2022 年にオンライン形式で代数学若手会を実施しました。若手の講演機会がコロナ禍前に比べて少なくなっていることへの配慮として、招待講演を設けずに全ての講演を若手によるものとししました。さらに、オンラインでは長時間の集中が難しいという理由で、2 日間開催を 2 回実施するなど、きめ細やかな工夫が凝らされていました。翌年の 2023 年に開催された第 27 回以降は、対面とオンラインを併用するハイブリッド形式での実施となっています。

このように、代数学若手会の実施方法の詳細は、その時々若手研究者が創意工夫を重ねることで、時代の変化に応じて柔軟に変化してきました。これからも変化していくと思われます。その一方で、若手の活気に満ちた集会であるという本質的な部分は今も昔も変わっていませんし、これからも変わらないでしょう。

最後に、上山の個人的な話をしたいと思います。上山にとって、はじめて学外で講演した研究集会が代数学若手会でした（当時、学部 4 年生でした）。様々な面で拙い講演だったと思いますが、そこで温かく迎え入れていただいたことは、この業界に自然に溶け込むことができた大きな要因であったと感じています。また、はじめて主催に関わった研究集会も代数学若手会であり、代々の世話人によって引き継がれてきたノウハウを学ぶ貴重な経験となりました。代数学若手会には院生時代の多くの思い出があり、とても愛着のある集会です。これからも代数学の若手研究者が交流し、切磋琢磨しながら学術的な発展を促す場として長く続いてほしいと願っています。

謝辞

代数学若手研究会に関する質問に答えてくださった、花木章秀氏、西中恒和氏、稗田吉成氏、高橋亮氏、相原琢磨氏、加瀬遼一氏、神代真也氏に心から感謝いたします。